



**Data**

監督・脚本・製作：賈樟柯（ジャ・ジャンクー）

出演：陳冲（ジョアン・チェン）／呂麗萍（リュイ・リーピン）／趙濤（チャオ・タオ）／陳建斌（チェン・ジェンビン）

## 👁️👁️ みどころ

本作は、四川省成都にある「420工場」で生きた8人の労働者の語りをまとめたドキュメンタリー。面白いのは、うち4人はニセモノで、賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督のミュージズ趙濤（チャオ・タオ）ら本職の俳優が演じていること。だからこれは、虚実混在のセミ・ドキュメンタリー！

瀋陽から成都へ大移転したのはなぜ？山口百恵の歌が突然流れるのはなぜ？8人の語りから学ぶ人間の生き方とは？中国現代史の実像とは？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■虚実混在のセミ・ドキュメンタリーとは？■□■

四川省の成都に実在していた、航空機エンジンを製造する巨大な国営工場が420工場。正式名称は「成発グループ」だが、軍の機密機関であるため「420工場」という略号が与えられたらしい。1958年に最先端技術を誇る軍事工場として設立された広大な敷地の「420工場」は、住居・商業施設はもちろん幼稚園から大学まで完備された1つの独立したコミュニティ。新生中国は大躍進政策（1958～60年）、文化大革命（1966～77年）から改革開放政策（1978年～）と大きく舵を切ったが、社会が大きく変動していく中、420工場とそこで働く約4000人の労働者がそれらによって大きな影響を受けたのは当然だ。近年軍事工場から家電製造工場へ転換したが、その過程では理不尽なリストラも。

以前から「工場」に強い関心を持っていた賈樟柯（ジャ・ジャンクー）監督は、1年3カ月かけて約100人の労働者から1人1人の物語を聞き取り撮影したが、それをそのま

ま編集し、ドキュメンタリー映画としなかったのが彼の工夫。つまり、本作は4人のホンモノの労働者の語りと、4人の俳優による聞き取ったたくさんのエピソードをつなぎ合わせ編集した語りが混在する。したがって、本作は虚実混在のセミ・ドキュメンタリー！

ホンモノの労働者による飾り気のない素朴な語りもいいが、いくらストーリーはデッチあげ(?)でも、やはり演技力のしっかりした俳優たちの語りはすばらしい。本作ではまず、そんな新たな手法に注目！

## ■□■いかにも日本的な邦題だが、原題は?■□■

馮艶(フォン・イェン)監督は一貫して三峡ダム建設によって水没していく長江沿岸部に住む農民たちの暮らしをカメラに撮り続け、『長江の夢』(97年)や『長江に生きる 乗愛の物語』(08年)を完成させた。しかし、山西省生まれのジャ・ジャンクー監督の『青の稲妻』(02年)の舞台は山西省の大同(ダートン)(『シネマルーム5』343頁参照)だし、『世界』(04年)も地方出身者の孤独を描いたもの(『シネマルーム17』289頁参照)。つまり、ベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞した『長江哀歌』(06年)は、たまたま「今撮っておかぬければ・・・」というジャ・ジャンクー監督の熱い想いによって、三峡ダム建設のため水没してしまう古都奉節(フォンジェ)を舞台として完成させた名作。

それに対して、本作の舞台は四川省の省都成都。また本作の「主人公」の1つが「うた」だから、邦題を『四川のうた』としたのはよく考えたアイデアだが、これは『長江哀歌』との連続性を狙ったもの・・・?別の言い方をすれば、原題の『二十四城記』では日本人には何のこともサッパリわからないから、興行的に成功しやすいように邦題を『四川のうた』としたわけだ。

ところで、「二十四城」ってナニ?それは、2005年12月に売却された56万㎡もある420工場の跡地に建設される新興住宅地の名前。その名前の由来は、古都・成都を詠う古典詩にあるらしい。映画の中では、7番目の登場人物である1974年生まれのニュースキャスター趙剛(チャオ・ガン)が訪れたショールームの中でその模型が示されるが、その巨大さにビックリ!ちなみに本作の撮影は、2008年5月12日に発生した四川大地震の前だったが、09年12月入居予定の二十四城に対する四川大地震の影響は?

## ■□■『古井戸』『青い罫』の、あの女優が!■□■

ホンモノの420工場の労働者3人が登場し、それぞれの人生を語った後、4番手(俳優1番手)として登場するのが、呂麗萍(リュイ・リーピン)演ずる生産ラインスタッフだったという郝大麗(ハオ・ダーリー)。『古井戸』(87年)の評論で、私が「市毛良枝に似た顔立ちで、結構美人」と評し(『シネマルーム5』82頁参照)、『青い罫』(93年)

の評論で「市毛良枝によく似た美人なのだから、一作ぐらいはヒロインとして、その美貌をみせつける作品があってもいいのではないかと思うのだが・・・」と書いた『シネマルーム5』102頁参照) 女優だ。

瀋陽にあった110工場が成都の420工場に移ることになったのは、毛沢東の「三線政策」のため。これは、毛沢東が1964年以降国防のために進めた政策で、東北地方にあった軍事産業、基幹産業施設を四川、貴州、雲南などの内陸地に疎開させるプロジェクト。そのため、21歳のダーリーも夫と子供と共に成都に向かったが、それは長江をさかのぼる船の旅。三峡のまち奉節で船が停泊した時、船酔いに苦しむダーリーは夫と子供と共に下船し、東の間の休息を楽しんだが、出航の汽笛を聞いて戻ろうとすると子供がいな。ダーリーと夫は必死で子供を探したが、軍事管理下にある工場労働者にとって汽笛の音は軍隊のラップと同じ。その結果、必死で子供の名前を叫び続けるダーリーを乗せたまま、船はゆっくりと陸を離れていくことに……。ダーリーが涙ながらに語るそんな悲しい物語を、あなたはどうか受け止める？

## ■□■「うた」も主役だが、なぜ山口百恵が？■□■

邦題を『四川のうた』とただけあって、本作では中国現代史を語る8人の登場人物と共に古都・成都を詠う古典詩の数々や時代を切り取る流行歌がもう1つの主役。といっても、映画冒頭の、420工場の跡地を土地開発業者に引き渡す式典で歌われる『歌唱祖国』をはじめ、そのほとんどが私には全くわからない。ところが、山口百恵のテレビドラマ『赤い疑惑』の主題歌が突然登場してくるからビックリ！

5番目の登場人物で、1966年成都生まれの社長室副主任宋衛東(ソン・ウェイドン)(陳建斌/チェン・ジェンビン)が「16歳の時俺は恋をした」と語り始める物語の中、ソン・ウェイドンからうまく別れの言葉を引き出した彼女の髪形は、『赤い疑惑』のヒロインと同じ「幸子ヘア」だったらしい。それは一体なぜ？また、1987年の『紅いコーリャン』で衝撃的デビューを飾った鞏俐(コン・リー)は「中国の山口百恵」と呼ばれたが、それはなぜ？なぜ、中国人は山口百恵を知ってるの？

それは、中国でも1974～80年に放映された全10作にわたる百恵ちゃんの「赤いシリーズ」が大ヒットしたから。

## ■□■『戦場の花』の、あの女優も！■□■

他方、1997年には中国戦乱の時代を背景に義理の兄を探すヒロイン小花(シャオホア)の物語である『戦場の花』が大ヒットしたらしい。そのヒロインとそっくりなのが、顧敏華(グウ・ミンホア)。そりゃ、そっくりなはず。だってグウ・ミンホアを演じたのは、

『戦場の花』で小花役を演じた陳冲（ジョアン・チェン）その人なのだから。彼女は、『ラストエンペラー』（87年）の第一夫人役で国際的に注目され、『ラスト、コーション』（07年）では易（イー）夫人役で登場した女優だ（『シネマルーム17』228頁参照）。

それにしても、ジャ・ジャンクー監督は工場労働者から聞き取ったさまざまなエピソードを架空の物語にまとめていくのがうまい。若い時の美貌のおかげで職場のみんなから「小花」と呼ばれていたグウ・ミンホアも今は中年のおばさんになったが、なお独身のまま。コーラスやマージャンを楽しみ、「今の私は“アイドル”じゃない。でも、“廃棄物”でもない」と語るグウ・ミンホアが語る、上海から成都に移り住んでからの人生とは？



『四川のうた』監督：ジャ・ジャンクー DVD発売中 販売元：バンダイビジュアル  
©2008 映画『四川のうた』製作委員会

## ■□■トリはやっぱり定番のミュージックが■□■

この映画には8人の労働者が登場するが、トリは420工場の労働者の娘蘇娜（スー・ナー）。スー・ナーを演ずるのは当然ジャ・ジャンクー監督のミュージック趙涛（チャオ・タオ）だ。スー・ナーが生まれたのは1982年。幹部社員だった父親は、スー・ナーを教育水

準の低い工場内の学校から進学校へ転校させたが、当の本人は勉強は全然ダメ。

今、彼女は自分の車を持ち、有閑マダムたちのブランド品を香港から仕入れるパイヤーとして活躍しているが、親子の絆は失われたままだ。ある日、通行証の手続のため久しぶりに母親が働いている工場に行った時彼女が目にしたのは、男か女かの区別もつかないまま汗水たらしながら働いている母親の姿。それを見たスー・ナーは、はじめて働くことを軽蔑していた自分を反省することに。スー・ナーが最後に語るセリフは、「両親に“二十四城”の部屋を買うの。高いことは知ってるわ。でも買ってみせる。私は労働者の娘だもの」という力強いもの。一体、彼女の心の中にどんな変化が起きたのだろうか？

そして映画のラストは、スー・ナーが視線を向ける先に見える広大な成都のまち並み。1949年の新生中国誕生後、姿を変えながら脈々と生き続けてきた60年の歴史がこの広大なまち並みの中に・・・。

2009（平成21）年3月21

71

井ノ口 坂和章平のLAW DE SHOW

「四川のうた」

(きょうからテアトル梅田で公開)



## 激動の中国現代史を本作から！

今やG2の重鎮国となり、空母建造まで公認する中国だが、毛沢東による一九六〇年代の「三線政策」は遠東者藩閥など東北地方に集積する軍事・基礎産業を内陸部の四川省などに展開させ、大プロジェクト、ベトナム戦争の拡大や中ソ関係の悪化がその背景だ。成都を拠点とした四川の歴史を、天安門事件など激動の歴史

巨大新興住宅地の前身は、軍の機動隊のため四〇〇工場を移された航空機エンジン製造の国営工場。

日本は戦後六十四年同、米田信隆の下に経済成長を実現し奇跡的に白出と平和を謳歌したが、中国は六六―七七の文革大革命、七八年以降の改革開放政策、八九年の天安門事件など激動の歴史

史、しかし少子高齢化が進む日本と同様、一人っ子政策の中国では現代史の勉強が不可欠。

そんな視点から「長江」(〇六年)に続き、王樟柯監督は、瀋陽から成都の四〇工場に移住してきた四千人の労働者のうち約百人を取材し、八人の労働者の語りと時代を交錯する四川の詩や歌によって鮮やかに

中国現代史を切り取った「もつと」も、うち西人は賈樟柯のミュージックビデオを含む著名俳優だから、その実態は事実と想像を混在させた「ドキュメンタリー」。それが、王樟柯の九時間超のドキュメンタリー大作「陝西區」(〇三年)や、鴻溝(二〇〇三年)や、鴻溝(二〇〇三年)や、鴻溝(二〇〇三年)の根本的相違点、構成はシンプルだが、個々の語りの実在度と重みは大きい。古都の巨大工場で五十年間働いて

大阪日日新聞 2009（平成21）年5月2日